

エイジズムの生起要因に関する研究

菊地 亜華里

健康寿命が延伸し、活動的な高齢者が増加しているにもかかわらず、高齢者に対する偏見や差別が依然として社会に蔓延している。これらはエイジズムと呼ばれ、あらゆる人々のエイジングプロセスに悪影響を及ぼすということが指摘されている。人々のより健康的で幸福なエイジングを実現するためには、エイジズムの生起メカニズムについて理論的に考察し、介入策を検討していく必要がある。エイジズムの生起を説明する理論について、特に心理学の分野では、存在脅威管理理論(TMT)と社会的アイデンティティ理論(SIT)に基づいた説明が主になされており、TMTでは死の不安、SITでは加齢不安に対処するメカニズムとしてエイジズムが機能するとされている。これに関してBodner(2009)は、エイジズムの説明に適した理論が、年齢によって異なる可能性を指摘した。本研究では、この視点を参考にして先行研究を整理し、若者が示すエイジズムはTMTとSITの両方の枠組みで、高齢者が示すエイジズムはSITの枠組みで説明されるという仮説を立てた。さらにここに、不確実性への不耐性という観点からこの年齢差を説明するという新たな視点を加えて、エイジズムの生起メカニズムに関する仮説モデルを作成した。

本研究では、得られた仮説モデルのうち、若者に関する部分を検討した。つまり、自身の加齢と死が不確実であるために、それらに対する不安が生じ、その2つの不安に対処するメカニズムとしてエイジズムが生起するというモデルが、若者を対象とした場合に成立するのか検証した。本研究では質問紙調査を実施し、顕在的エイジズム、加齢不安、死の不安のそれぞれの強さと、加齢と死についての不確実性の度合いを測定した。また、統制変数として、年齢、性別、配偶者の有無、主観的健康状態、加齢や高齢者に関する知識の有無、高齢者との交流状況を尋ねた。

モデルを検証するために、まず、加齢と死の不確実性と不安の関係を検討した。加齢や死を不確実なものとして捉えている人は、そうでない人よりも不安が強いと予想されたが、分析の結果、両方で不安の強さに差は見られなかった。一方で、自分自身の加齢や死について考えたこともないという人が一定数見られ、そのような人は、考えたことがあるという人に比べて、加齢や死に対する不安が強いという結果が得られた。このことから、若者の場合は、自身の加齢や死が不確実であるか否かという点に加えて、それらについて考える段階に至っているかという点にも着目する必要があるという知見が得られた。さらに、若者は今後、自分自身の加齢や死について考える機会が増えることが予想され、不安が高まる可能性も考えられたことから、若者と高齢者で分けて検討するというこれまでの視点では不十分であり、中年者など、その間の年代を含めたモデルを再検討する必要があるということが示唆された。次に、2つの不安とエイジズムの関係を検討した。若者のエイジズムには、加齢不安と死の不安の両方が影響すると予想されたが、分析の結果、加齢不安のみがエイジズムの予測因子として得られた。また、各不安の下位尺度ごとにも検討した結果、加齢不安の中でも「高齢者への恐れ」と「自己に関する喪失」がエイジズムを予測していた。さらに、分析の結果、高齢者との交流の量的側面が、加齢不安の下位尺度「高齢者への恐れ」を経由してエイジズムに影響している可能性が示唆された。これらの結果から、統制変数や他の下位尺度が、一部の優勢な下位尺度に影響し、そこから間接的にエイジズムに影響している可能性が示唆された。したがって、今後は、間接的効果も考慮したモデルを再構築し、実際にパス解析等を用いて検証していくことが望まれる。(臨床死生学・老年行動学)